

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年3月25日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2012

課題番号：21520719

研究課題名（和文） アルタイ諸地域での遺跡遺物の再利用を通してみた突厥遊牧民の祖先崇拝の文化史研究

研究課題名（英文） Cultural studies on the belief on the ancestors among the Ancient Turkic peoples on the basis of the analysis of the old sites and relics around the Altai regions.

研究代表者

大澤 孝 (OSAWA TAKASHI)

大阪大学・大学院言語文化研究科・教授

研究者番号：20263345

研究成果の概要(和文):本研究では、モンゴル国や南シベリア方面のアルタイ山脈周辺地域で、突厥などの古代遊牧民の埋葬遺跡や遺物を現地の研究機関と共同で実施してきた。その結果、青銅器時代の遺跡を、後代に死者の記念碑や墓碑銘として再利用している事例が確認された。この背景には、遊牧民特有の実利的な考えと並んで、当地の祖霊を自分たちの信仰対象にするという彼ら独自の崇拝形態が窺えるものといえよう。

研究成果の概要(英文): In the joint research with the local research Institute on the Ancient Turkic nomad peoples around the Altai Mountains of the Mongolia and the Southern Siberia, I could confirm that they reutilized the ancient sites and relics of the Bronze ages in constructing their own tombs and inscriptions as not only on the cause of their programmatic purposes but also on the basis their particular cult-belief and worship on spirits of their own ancestors.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：中央ユーラシア史

1. 研究開始当初の背景

(1) 1991年のソ連崩壊後、これまで西側外国人が立ち入ることができなかったモンゴル高原や南シベリア方面には、現地の研究機関や研究者と共同調査できる研究環境が訪れた。私はこうした状況を受けて、1996年以来、モンゴル科学アカデミー歴史学研究所や考古学研究所と学術協定を結び、古代トルコ時代の遺跡やルーン文字碑文を現地調査し、資料の収集を行って来た。

(2) そうした現地調査とそれに基づく解読研究を行う一方では、遺跡や碑文が建造された歴史環境にも留意しながら、遺跡そのものの立地条件や設立目的にもできるだけ注意を注いで、調査を行なって来た。

2. 研究の目的

(1) まずは、現地の研究機関や研究者と共同調査を行いつつ、新発見の遺跡や碑文はもとより、すでに発表された遺跡や碑文につい

ても、鮮明な写真や拓本などを用い、さらに詳細な分析を行うための研究材料を収集することが挙げられる。

(2) 次にここで得られた資料の分析を行い、当該遺跡が建造された場所や環境にも留意しながら、その設立場所や歴史環境を明らかにする。

(3) こうした調査を通して、これまで私がしばしば目撃してきた古代遺跡の再利用の実態を収集分析しつつ、その扱い方を通して本遺跡を建造した遊牧民たちの世界観や信仰観を明らかにすることも本研究目的のひとつである。

3. 研究の方法

(1) まず、上記で述べたモンゴル国や南シベリア諸国における学術研究機関や研究者と学術協定を締結した上で、共同調査を行い、遺跡や碑文について、立地場所、遺跡碑文の形状や計測を行い、整理を行う。

(2) 鮮明な写真や拓本を分析しつつ、碑文に関しては同時代の漢文資料や同時代の碑文資料との比較を通して、字句やテキスト内容の解読を行い、碑文の主人公や設立目的などを明らかにする。

(3) 遺跡についても、それが建造された地点の歴史地理学的な観点から調査を行い、当時の遺跡の設立目的に関して考察を加える。

(4) 特に、その中でも前時代の遺跡を再利用している遺跡に関しては、前時代の遺跡がいつ頃のものなのかを見極めながら、何故にそれが後代に再利用されているのかという点に関して、遊牧民にみられる実用主義的な考え方なのか、それとも祖先崇拜の範疇に含められるものなのかについて、分析を加える。

(5) 特に祖先崇拜との関連性が濃厚な場合に関しては、従来いわれてきた突厥やウイグルなどの祖先崇拜の仕組みといかなる関連にあるのかという点についても各種の史料と比較しながら、考察する。

4. 研究成果

(1) まず、本調査により、これまで未発見であった遺跡や碑文が複数、確認できた点は大きな成果であるといえる。例えば、モンゴルのバヤンホンゴル県のオロン・ノール遺跡とその石槨外側に刻まれたルーン文字碑文、アルハンガイ県イフタミル郡のバガ・ハイルハン岸壁銘文、オブル・ハンガイ県のテブシン岸壁銘文、ボルガン県のザーマル遺跡から出土した銀器銘文などがそれに相当する。

(2) ここで得られた成果の中では、特にオロン・ノール碑文からは、これまでルーン文字銘文では未発見とされてきた用語や歴史的に不明とされてきた字句を解明する手がかりとなる字句が解読されたことにより文献学的に大きな成果をもたらすことになった

ということが出来る。同時に本銘文を含む遺跡時代が、これまであまり知られていなかったモンゴル高原の南西部に見つかったことは、従来の突厥時代の勢力範囲が予想以上に後代であったことを物語るものとして重要な意味を持つ。

(3) また遺跡や遺物の再利用という点からは、例えば、アルハンガイ県のイフタミル郡で確認されたギンディン・ブラク第2遺跡の石槨が青銅器時代の鹿石を再利用する形で建造されていた点は極めて興味深く、そこにははっきりと鹿の形状が刻まれていた。またその遺跡の100m東方には、巨大な青銅器時代のヘレクスフルがあり、鹿石はここから運び出されたことが明らかである。

(4) またボルガン県のザーマル遺跡から今回発見された銀器銘文については、新たな字句の解読成果の他に、これが7世紀中葉の遺跡から見つかったこと字体、検討に値するものとなる。これまでルーン文字は8世紀前半に年代づけられるにもかかわらず、本遺物は7世紀中葉のものであることが漢文の墓誌銘文からはっきりしていることから、本銘文が最初期のルーン文字である可能性は否定できない。但し、もしこれが墓の建造年より後のものであるならば、遺物を再利用する形で、後代の8世紀中頃に銘文が刻みつけられた可能性も否定することはできないであろう。

(5) このように、古代遊牧民の墳墓や遺跡の中には、青銅器時代のヘレクスフルや鹿石などの遺跡の一部を自らの埋葬記念碑の造営の際に再利用している事例が多く確認された。こうした事例の背景には、遊牧民として、利用できるものは何でも利用するという現代にまで通じる実利的な理由も否定できない。一方、ギンディン・ブラク第2遺跡にみられるような青銅器時代の鹿石を後代の墓の石槨として再利用したり、ザーマル遺跡発見の銀器に後代に銘文を刻んで死者の霊に捧げる例からみると、前代の墓の一部を自分たちの墓の一部とすることで、かつての遊牧民の慰霊をも自らの祖霊の中に加えて、尊崇する感情も可能性もなお否定できないのではないかと、という考えも成り立つかもしれないという結論を得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計11件)

① Takashi OSAWA, Historical significance on the coexistence of languages, cultures and cult-beliefs under the Early old Turkic Kagh anate from the Ötüken yış to the Tianshan regions, National commission of the Republic of Kazakhstan for Unesco and Isesco (eds),

The 9th Eurasian Scientific Forum, Heritage of L.N. Gumilyov and modern Eurasian Integration, 査読有, Vol.10-11, 2012, 636-650

② Takashi OSAWA, Revisiting the Ongi inscription of Mongolia from the Second Turkic Qaghanate on the basis of rubbings by G. J. Ramstedt, *Journal de la Societe Finno-Ougrienne*, 査読有, Vol.93, 2011, 147-203.

③ Takashi OSAWA, A hypothesis on the etymology of the Old Turkic royal clan name Ašina/Aşinas and the transformation process in the early Abbasid period, *Chronica*, 査読有, Vol.10, 2011, 143-151

④ Takashi OSAWA, Eski Türk Devletinin asıl soyadı Ashina mı yoksa Ashinas mı ? Hayat Develi, Mustafa Kaçalın et al (eds.), *Mahmūd al-Kāşgarī'nin 1000. Doğum Yıldönümü Dolaysıyla Uluslararası Divanī Lügāt-t Türk Sempozyumu 5-7 Eylül 2008*, İstanbul. 査読有, 2011, 253-288

⑤ Такаси Осава, Косецу Сузуки, Г. Лхундуб, Заамарын шороон довоос олдсон мөнгөн сав дээрх руни бичээс, *Studia Archaeologica*, 査読有 Vol.30-1/14, 2011, 139-145

⑥ Takashi OSAWA, The significance of the Ötüken yer to the ancient Türks, Mehmet Ölmez (ed.) *Ötüken'den İstanbul'a sempozyumu 3-5th December 2010*, İstanbul, April 2011, 査読有, 405-423

⑦ Takashi OSAWA, On the historical contacts of the Nine Tatar (zubu) peoples with the Yenisei Khirghiz and the Uighur tribes in the Southern Siberia in the 8th-10th Century AD, *Древние и Современные народы Южной Сибири, Язык, История, Культура* (к 290-летию Экспедиции Д.Г. Мессершмидта), 査読有, 2011, 21-53

⑧ 大澤 孝, 「ホル・アスガト碑銘考」『内陸アジア言語の研究』, 査読有, 25, 2010, 1-73

⑨ Takashi OSAWA, The problems on the runic text of Tes inscription in the early Uighur period, *Bulletin, Nomadic Studies*, 査読有, Vol.17, 2010 102-121

⑩ Takashi OSAWA, Moğolistan/da son zamanda keşfedilen Olon Nuur'ın Khöndü'deki Anıt ve yazıtı üzerine ön çalışmalar, I, *Uluslararası Uzak Asya'dan Ön Asya'ya Eski Türkçe Bilgi Şöleni Bildirileri*, 査読有, Vol. 1, 2010, 191-209

⑪ Takashi OSAWA, The Cultural relationship between old Turkic kingship and deer image, J. Bemmann et al (eds.) *Current Archaeological Research in Mongolia, Bonn Contribution to Asian Archaeology*, 査読有, Vol.4, 2009, 403-418

[学会発表] (計 12 件)

① Takashi OSAWA, Problems of the transliteration of unusual Runic letters at the bottom of some silver vessels from Mongolia and the Southern Siberia and their historical background, *Marginale Formen des alttürkischen Schrifttums Nicht-klassische alttürkische Runeninschriften im Zentrum Eurasiens und ihre Entzifferung*, 23rd November, 2012, Berlin Frei Iniversity, ドイツ

② Takashi OSAWA, New interpretation of the old Turkic epigraphs on the musical instrument from the rock cave tomb of Khovd aimag, The International Archaeology conference of the "MONGOLIAN ARCHAEOLOGY: PRESENT AND FUTURE", 24th August, 2012, Institute of Archaeology, Ulaanbaatar, モンゴル国.

③ Takashi OSAWA, The investigation and resoration of the Old Turkic musical instrument from the Khovd aimag of Mongolia, The international congress <Forum> on the culture of Hakasia, 10-12 July, 2-12, Abakan. 11th July 2012, The Khakhas Institute of Language, Literature and History, Khakhasia, ハカス共和国, ロシア.

④ Takashi OSAWA, The Problems on the common language and cultural language in Mongolia under the old Turkic Kaghanate during the 6th century AD, International Conference on Language, Society and Culture in Asia, 9th March, 2012, Center for Study of Foreign Languages, School of Humanities, University of Hyderabad, India.

⑤ Takashi OSAWA, Kulturno-Historicheskoe Nasleniye Epokh Bronzi I Zheleza Tsentralinoi Azii, *Burunts Demir Eyyamlary we Turkmenin Maddy-Ruhy Mirasy*, International Scientific Conference, 10 November, 2011, Archaeological Institute of Turkmenistan, Ashgabad, Turkmenistan.

⑥ Takashi OSAWA, On the historical functional Change of Tamgas and Nishan-seals in the old Turkic nomad tribes of the Eurasian Steppe,

Hunnygin Ezent uls ba Mongolin Ertii Tyxyiin Sudlagaa, olon ulsin erdem Shinzhilgiin xural, Ulaanbaatar, 26th August 2011, Institute of History of Mongolia, Ulaanbaatar, Mongolia.

⑦ Takashi OSAWA, Eski Türklerin başkentinin Ötüken yış'ın olan sebebi nedir ? Ötüken'den İstanbul'a Türkçe'nin 1290 yılı sempozyumu, 5 December, 2010. İstanbul, Turkey.

⑧ Takashi OSAWA, What titles does Enlig or stand for in the old Runic epitaph named shanchi III (E-152) in Tuva?, Tuvinskaya Pi'smenost'i Voprosi Issledovaniya Pis'menosttei i pis'mennikh Pamyatnikov Rossii i Tsentral'no-Aziatskogo Regiaina, 1-4th Juriya, 2010, Institute of Humanism of Kizil, Tuva, Russia.

⑨ Takashi OSAWA, Türk Bilge Kagan'ın tahta oturduğu nda kım Tölis şad idi? I. Uluslararası Türkiyat Araştırma Sempozyumuö 28th Mayö 2010ö Ankara, Türkiyat araştırma Enstitüsü Hacetepe Universityö Ankara, Turkey.

⑩ Takashi OSAWA, Eski Türk Kağan'ın kudreti ve geyikle arasındaki kültürel ilişkiler üzerine 2.ci Uluslararası Türk Dünyası Kültürü Kongresiö 20th April, 2010, İzmir, Turkey.

⑪ Takashi OSAWA, Moğolistan'da yeni keşfedilen Galuut anıtı ve yazı üzerine I. Uluslararası Eski Türkçe Sempozyumu, 19th, November, 2009, Afyon Kocaeli Üniversitesi, Turkey

⑫ Takashi OSAWA, On problems and cultural backgrounds of Mirror scripts in the old Turkic Epitaphs, International Symposium, Interpreting the Turkic runeform sources and the position of the Laty corpus, 21th Mayö 2009ö Gorno-Ataik Univesiy, Republic of Alati, Russia.

[図書] (計 3 件)

① Takashi OSAWA ; J.E. Pim, S. A. Yatsenko, O. T. Perrin (eds.) Traditional Marking System; A Preliminary Survey, Dunkling Books, London. 2010. 520 p. (担当は 339-370)

② Takashi OSAWA; Maracz Laszlo, Obrusanszky Borbala (eds.) A Hunok Oroksege, Hun-idea Szellemi Hagyományorzo Muhely, Budapest, Hungary, 2009, 478p. (担当頁 387-405).

③ T.Osawa, K. Suzuki, R. Munkhtulga, Bichees

II, 2006 onoos 2008 oni Mongol uls daxi Turgiin bichees ba erti in dursgalig sudlakh ekspeditsiin, Ulaanbaatar, 2009, 150p.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大澤 孝 (OSAWA TAKASHI)

大阪大学・大学院言語文化研究科・教授

研究者番号：20263345

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし